

教育者・吉田松陰と儒教精神

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2008-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 荒川, 紘
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.14945/00000449

教育者・吉田松陰と儒教精神

荒 川 紘

一八五九（安政六）年一〇月一六日、幕府評所は吉田松陰を流罪にあたるとして老中に上申したが、大老井伊直弼は「流」の字を「死」に書き換えた。死罪確定である。江戸・小伝馬町の牢獄でこれを漏れ聞いた松陰は故郷の萩に住む父と親族にあてた訣別の書を書き、いよいよ死の迫っているのを知った二五日から二六日にかけて、門下生への遺書『留魂録』をしたためた。その翌日の朝、評定所への呼び出しがあり、死罪が言い渡される。ただちに、小伝馬町の牢獄にもどされ、午前一〇時ごろ、刑は執行された。数え三〇歳の命は安政の大獄の嵐のなかで武蔵の露と消え、松下村塾を主宰していた吉田松陰の教育活動も終わった。

しかし、松陰を処刑した徳川幕府はその後急速に瓦解への道を歩みはじめる。翌年の三月、幕府の最高権力者として安政の大獄を指揮した井伊直弼は桜田門外で水戸藩の脱藩浪士に暗殺された。それをきっかけにして反幕府の運動は活発化する。私の蒔いた稲粒を実らせてほしいと諭す『留魂録』を読んだ松陰の教え子たちも奮い立つ。もはや目標は討幕しかない。その戦いのなかばで、久坂玄瑞・吉田栄太郎・入江杉蔵・高杉晋作ら多くの教え子が命を落とすが、彼らの先導した討幕の戦いは勝利する。松陰の死から八年後、二六五年つづいた徳川幕府も倒壊した。

時代を変えた吉田松陰の教育活動を私たちはどのように考えるべきなのか。本論では、なにが教育者・吉田松陰を生み

出したのか、をさぐることから松陰の教育の意味に迫りたい。

かつては「教育勅語」を体現した「忠君愛国」の教育者として称えられていた松陰であった。たしかに、松陰は熱烈な尊王論者だった。しかし、幕藩体制下での尊王論者であったことを見落としてはならない。社会の変革に命を賭けた教育者だったのである。その松陰の思想は多くの人間との交遊と膨大な読書によって形成されたのだが、教育者・吉田松陰をその心の底から衝き動かした力は、これは本論の結論であるのだが、武士の教養として幼いときから身につけた儒教の精神にあった。体制維持の学として学ばれていた儒教が体制を覆す思想に転化したのである。学の可能性、そこに現代の教育の危機を克服するための重要な鍵も隠されている、と私は考えている。

1 東北旅行——尊王攘夷論との出会い

長州の萩に生まれた吉田松陰は二〇歳からの後半生の多くの時間を旅にすごした。江戸の獄で三〇歳の命を奪われるまで、獄中と幽閉のときをのぞけば、旅の空の下に暮らしたといってよい。北は青森、西は平戸・長崎、四国や佐渡にも足をのばしていた。それも物見遊山などではない。人間の精神的成長には読書も必要だが、旅には書物からは求めることのできない効用があると考えていたのだ。それまでは長州のそとに出ることのなかった二一歳の松陰の最初の大旅行は、藩校・明倫館の兵学師範として、平戸の山鹿万介と葉山左内に学ぶためにかけた九州への旅、その旅を記録した『西遊日記』の「序」では、「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり」とのべている。「序」の文であるが、旅の後にそのときの実感を綴ったものであろう。旅はつねに遊学であった。

その一年後、藩主・毛利慶親にしたがい、兵学修業のために江戸にのぼった松陰は東北の旅にでる。出発は一八五一（嘉永四）年一二月一五日、関所手形の発行が遅れたため、脱藩を覚悟しての決行となった。水戸で兵学家の友人・宮部鼎蔵と合流して、外国船が航行するようになった本州北部を視察するというのが目的、水戸から白河までは、兄の敵討ちのため南部に帰るといふ江幡五郎も同行した。

しかし、松陰には水戸の学者たちと交遊することがもうひとつの目的であつたように思われる。六月二日に江戸から兄にあてた手紙のなかで、松陰は、「江戸にて兵学者と申すものは噂程に之れなき様相聞き候事。付^{つけ}り、新論は之あり候へども、未だ手に入り申さず候。官許之なき書故、書肆へは頭はれ申さず候」と書いている。江戸に出てきたが、師事したい兵学者はいない。それよりも、会沢正志斎の『新論』（九州旅行のおり葉山佐内のところで読むことのできた蔵書の一冊である）を購入したいのだが、発禁本であるため、手に入らないというのである。水戸の尊王攘夷思想をより深く学びたい、直接に水戸の学者と会えるに越したことはない、と考えていたのだろう。

実際、約三カ月半の旅のうちの一月あまりも水戸で過ごし、年末から年始にかけて、会沢正志斎・豊田彦次郎・桑原幾太郎・山国喜八郎らを訪ねている。すべて、尊攘派の水戸学者、藩政改革を強力にすすめた水戸藩主・徳川斉昭の側近たちである。とくに会沢のところには、水戸に着いて最初に顔をだし、その後五回も訪ねるが、すでに七〇歳を超えていた水戸学の重鎮は長州の若者を暖かくむかえてくれた。そのときの印象を、松陰は『東北遊日記』に「会沢を訪ふこと数次なるに率^{おほむ}ね酒を設く。水府の風、他邦の人に接するに款待甚だ渥く、歓然として欣びを交へ、心胸を吐露して隱匿する所なし。会^{たまたま}談論の聴くべきものあれば、必ず筆を把りて之れを記す。是れ其の天下の事に通じ、天下の力を得る所以か」（嘉永五年一月一七日）と記している。藤田東湖や戸田銀次郎にも会いたかったが、謹慎が解けてからまもないとの理由で面会できなかった。

水戸での宿は藤田東湖の従兄弟であった水戸藩士の永井政助宅、江戸・飯田町で剣道場・練兵館を開いていた斎藤弥九郎の子息である斎藤新太郎の紹介による。弥九郎は藤田東湖と長年の知己であり、他方で、新太郎は長州藩との交流があり、松陰とも親しい仲であった。そのような関係で、松陰は水戸の有力な学者たちを訪問できたのである。その訪問の間には、宮部や江幡とともに徳川光圀ゆかりの西山荘や藩主の墓所である瑞龍山、斉昭の建てた偕楽園の好文亭をおとずれ、鹿島神宮にも詣でている。光圀と斉昭は水戸学を象徴する藩主、神儒一致をモットーとする水戸学では鹿島神宮にたいする崇拜が篤かった。藩校の弘道館には鹿島神宮の分社が孔子廟とともに建てられていた。

水戸での滞在、わけても会沢との出会いは、松陰の思想形成にとって決定的な意味をもつことになった。松陰は尊王攘夷論に惹きつけられてゆく。水戸滞在中に友人の来原良蔵にあてた手紙でも、「僕水府の遊学頗る益あるを覚ゆ」としたためていた。そのご、一八五六（安政三）年、杉家に幽閉こもされているときにまとめられた『講孟余話』でも、「余深く水府の学に服す。謂おもへらく、神州の道斯こころに在りと」（尽心下第二十六章）とのべている。

その水戸での遊学の益としてあげられるのは、尊王攘夷論を基本から学ぶことができた点にある。江戸にもどった松陰には帰藩命令が出され、一八五二（嘉永五）年五月に萩の杉家に戻るが、そのときに書かれた手記『睡余事録』には、「身皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らざれば何を以て天地に立たん。故に日本書紀三十巻を読み、之に継ぐに続日本紀四十巻を以てす」とあるように、日本という国の特有な国がら、つまり「国体」を理解するには日本史関係の書物を読まねばならないことを教えられた。松陰はそれを実行する。『日本書紀』『続日本紀』につづいて、『日本逸史』『続日本後紀』『職官志』『令義解』『日本外史』を読破する。そのほかにも、漢籍の『史記』『漢書』『十八史略』もひもといている。

兵学師範であった松陰にとって、読書といえば四書・五経と兵学書。平戸の葉山左内のもとでは、『新論』や陽明学関係の書、それに世界地理書も読むことができて、精神的視界が広がり、水戸学と出会うことで、史書それも日本史にまで拡

大する。さらには、それまでとは違った歴史の読み方に接する。野口武彦が詳しい議論をしているように、水戸学の特質は、「朱子学者たちが注意深く切り離してきた歴史と同時代とはいっしか同次元に連続する」という点にあった。⁽¹⁾ 現実の政治的理念が歴史的思惟によって再構築されるのである。その年の十二月には藩命がくだり、士籍が奪われ、兵学師範の地位を失う松陰ではあるが、新しい学の領域を見いだしていた。

水戸学と日本史関係書の読書はそのごもつづく。長崎に停泊していたロシアのプチャーチン艦隊での海外渡航に失敗した帰路の一八五三（嘉永六）年十一月、瀬戸内海の船中で、宮部と『新論』を数回よんだことを、兄の梅太郎に手紙で伝えている。一八五四（安政元）年三月には下田から同藩の友人・金子重之助と一緒に海外に渡航しようとして捕らえられた松陰は江戸・小伝馬町の牢をへて一〇月二四日に萩の野山獄（武士用）に収監されるが（重之助は一般庶民用の岩倉獄）、『野山獄読書日記』によると、松陰が獄中で読んだ本はその年のうちに『蒙求』『延喜式』『史徴』からはじまって一〇六冊、翌年の十二月に出獄して杉家に移されるまでに約五〇〇冊にのぼる。経書、史書、地理書、曆書、詩書など広い領域におよぶが、なかでも水戸学関係の書物と歴史学関係の書物が目立つ。会沢の『草偃和言』『迪彝篇』や東湖の『弘道館記述義』『常陸帯』もふくまれていた。野山獄では読書は自由で、兄の梅太郎と叔父の玉木文之進が書物を獄に届けてくれた。

杉家幽閉の身となっても、読書のペースは変わらない。あいかわらず、『弘道館記述義』『新論』、それに会沢の『下学邇言』『豈好弁』や青山延于の『皇朝史略』といった水戸学関係の書物が多く、『新論』については幽閉中だけでも七回も読み返している。氷解しない疑問点もあったのかもしれないが、むしろそれほどまで松陰の心を強く惹きつけた書であったのだろう。日本史関係では、たとえば『日本外史』『古事記伝』『皇朝史略』『中朝事実』『読史余論』『神皇正統記』などがふくまれていた。

日本の歴史を古代から学ぶ。こうして尊王攘夷にたいする信念はさらに確固なものになる。一八五六（安政三年）に執筆

した「斎藤生の文を評す」では「謹んで按ずるに、我が大八洲は、皇祖肇むる所にして、万世の子孫に伝へたまひ、天壤と窮りなき者、他人の覬覦（きんぐん）（分不相応な望みを抱くこと）すべきに非ざるなり。其の一人の天下たること、亦明かなり」（『丙辰幽室文稿』）とのべていた。天下は、皇祖アマテラスの子孫である「一人」の天皇の天下であると断ずる。

私たちにとって注目されるのは、水戸学の尊王攘夷論は政治思想であると同時に教育目標であり、そして、それは松陰の政治思想であると同時に松陰の教育目標となった点にある。松陰が教育問題について会沢らとどのような議論をしたか、日記や手紙にはふれられていない。しかし、会沢は藩校・弘道館の開設に尽力、初代の教授頭取をつとめていたのであり、そのころは私塾・南街塾で全国各地から会沢を慕って集まった若者たちの教育に専念していた。⁽²⁾ 胸襟をひらいたふたりの議論のなかで、教育の問題が出なかつたとは考えがたい。やがて、松下村塾で子弟の教育にあたらうとした松陰に少なくない影響をおよぼしたと推察される。この点についてはあとでも触れる。

松陰の教育にたいする関心の強さは、旅行中に各地の藩校を訪れていることからうかがわれる。水戸に入る前には笠間の藩校・時習館を訪問、『孟子』首章の講義をし、会津若松では藩校・日新館の教育制度を調べ、授業を参観した。帰路でも、仙台では藩校の養賢堂についての詳細な調査をおこない、学頭の大槻磐溪を訪問、足利では足利学校を見学している。

日記には水戸の藩校・弘道館についての記載もない。この点も不可解である。設立から一〇年、弘道館はもともと注目されていた藩校だったのである。ただ、当時、藩政の実権は反改革派の手中にあり、会沢らは弘道館から締め出されていた。松陰が弘道館についてふれなかつた理由はこのへんにあるのかもしれない。宮部の『東北遊日記』（嘉永四年二月二六日）には、「今は則ち公（徳川斉昭）位を遜り、学校（弘道館）も亦昔日の盛の如くに能はず」と記されている。⁽³⁾

2 江戸遊学——眼は海を超えて

松陰が江戸の地でもっとも信頼を寄せていたのが佐久間象山であった。一八五一（嘉永四）年四月、最初の江戸遊学のときには山鹿素水、古賀謹一郎、佐久間象山といった、江戸の有力な学者の門をたたいたが、松陰を惹きつけたのはその前年に江戸木挽町に開かれた象山の西洋砲術塾であった。その年の一〇月二三日に、叔父の玉木文之進へあてた手紙では、「真田侯佐久間修理（象山）と申す人頗る豪傑卓異の人に御座候」とのべていた。このときは、東北旅行にでかけたため、顔をだした回数は少なかったが、二年後、ふたたび遊学のため江戸に出た松陰はふたたび象山の塾に入る。このときにも、兄の杉梅太郎に「佐久間象山は当今の豪傑、都下一人に御座候」（嘉永六年九月一五日）と書いている。

象山は朱子学者でもある。経学も疎かにしない。だから、いまあげた玉木文之進への手紙には「其の入塾生砲術の為に入れ候ものにて必ず経学をさせ、経学の為に入れ候ものにて必ず砲術をさせ候様仕懸けに御座候」とある。経学と砲術の両方に通じなければならぬ、というのが象山の教育理念であった。文武両道を徹底させる。一八五四（安政元）年一〇月に松陰が下田からの密航をそそのかしたという廉で佐久間象山が松代で謹慎の身となったとき著わした『省譽録』でのべていた「東洋の道德、西洋の芸術（技術）」に通ずるといってよい。⁽⁴⁾

しかし、松陰の人生を決定づけたのは、象山が力説した西洋文明の直視、洋学修学的重要性であった。『省譽録』にも、「夷俗を馭するは、先ず夷情を知るに如くは莫^なし。夷情を知るには、先ず夷語に通ずるに如くは莫^なし」、という象山のことばが見られる。⁽⁵⁾ 松陰はこの象山の戦略にしたがって密航を企てたのだが、下田での失敗の直後、下田の牢では「夷情を審にせずんば何ぞ夷を馭せん」（『幽囚録』「下田の獄中にて渋木生に示す」との詩を詠んでいた。夷狄の国の実情を知らなければど

うして夷狄をあしらうことができようか。入獄直後の十一月に書いた『幽囚録』では、古代の日本には、「己れを虚しくして物を納れ、人の長を採りて己の短を補ひ、彼の有を遷して我の無を贍^{みた}」していたという。後世の人間も、かつて日本が短を外国の長によって補っていたのを学ばねばならない。『講孟余話』でも、洋学を儒学より上位のものと見るべきでないにしても、それを「外道・邪魔として一切に拒絶する」（尽心上末章）のも過ちであるとしていた。

象山の意見を容れて海外へ飛び出そうとさえする。会沢正志斎から学んだのが歴史という縦の時間的な世界であるのにたいして、佐久間象山から学んだのは、海外への視野という横の空間的な世界。松陰は旅の修業によって、この縦と横の時空的な世界に開眼する。

そして、外国の技術を学ぶためには学校の設立が必要であると考えていた。『幽囚録』では、天皇の住む京都の警備のために江戸城に代わる西洋式の「大城」を京都に近い伏見に築いて、そこには西洋式の砲術などを教える「兵学校」を設立するという学校構想を提言する。「夷情を知るには、先ず夷語に通ずるに如くは莫し」、「兵学校」には、外国語学科を設け、オランダ、ロシア、アメリカ、イギリスの書をつかった講義がなされるべきであるとしている。オランダ語のほかにも、ロシア語、英語もふくまれているのは、アメリカのペリーやロシアのプチャーチンが来航し、イギリスが日本をうかがっている外患をふまえた教育政策である。

ただし、洋学的重要性を説いても、外国人の教師は考えてはいない。国内の優秀な人間を各国に派遣して、その国の学問を修めさせて、日本の学校の教師に採用したらよいという。

その四年後の一八五八（安政五）年五月に書かれた上書にも学校設立の構想が認められる。松陰が処刑される前年、松下村塾の塾舎を増築するなど教育に多忙でありながら、日米修好通商条約をめぐって、塾生たちを江戸や京都に派遣するなど積極的な動きをみせていたが、「対策一道」（『戊午幽室文稿』）や「愚論」（同）につづいて書かれた上書の「続愚論」（同）で

は、京都に文武を兼ねた「大学校」を設立する必要性を説く（これらの上書は京都に住む尊攘派の詩人梁川星巖に送られ、孝明天皇にも届けられた）。「大学校」には文武の学生の寄宿舎と銃兵訓練所が建てられねばならず、付属の施設として、製本所、製薬所、鑄銃所、工作所などが考えられていた。さらに、航海学の学科の設立にも言及している。広い意味での兵学校ないし洋学校である。学生には、皇子皇孫から庶民まで、貴賤尊卑のへだてなく集められるべきであるとした。すべての階層の人間に教育はほどこされねばならない、というのが松陰の持論であった。

七月には、日米修好通商条約の締結は国家存亡の問題であると考えた松陰が、それとの関連で、長州藩にたいする提言「急務四条」を書く。そのなかでは、後漢の光武帝が「太学」を創建し、唐の太宗が弘文館を設置し、それによって、天子みずから研鑽していたが、わが藩主もそれに倣うべきである、とのべていた。

おなじところに書かれた「学校を論ず、附、作場」（『戊午幽室文稿』）では、長州藩も人材育成のために「学校」の振興と「作場」の新設を急がねばならないとされていた。「学問」のほか「学芸（技術）」の教育にも力を入れ、兵農曆算、天文地理その他の「学芸」にすぐれたもの、機械や船舶の技術を教えねばならないと主張する。東北旅行では各地の藩校を視察していた松陰であったが、明倫館を離れてからも、藩の教育を気遣っていた。考えは、「兵学校」や「大学校」の場合と変わりが無い。ここでも、「今世、学生は固より已に空疎にして、事務を解せず、工匠は愚朴にして、要需を知らず。二者分れて、鴻溝（大きなみぞ）を為すという」。学問をする人間は空疎な言に陥る傾向があつて、実務的なことを理解できない。逆に、実務にたずさわるものは学問の必要性がわかつていない。だから、両者を一緒に学ばせねばならないという。この教育姿勢が佐久間象山を意識したものであることは、「吾が師象山曰く、学必ず事あり、徒らに空文を誦し空理を弄ぶのみに非ず。書を学び、剣を学ぶが如き、以て見るべし。故に其の礮術（砲術）、自ら称して礮学と曰ふ、亦空文空理を抑へて、これを実事に熟するの微意なり」との付記が見られることから明らかである。

洋学の導入は時代の潮流であり、幕府も藩もその実現に努力していた。幕府はペリー来航の二年後の一八五五（安政二年）に長崎海軍伝習所を開設、その翌年には洋学の学校・蕃書調所を設立している。長州藩も以前から存在していた「西洋学所」を一八五六年明倫館の構内に移転し、一八五九年には「博習堂」と改称、軍事教育に比重をうつして規模を拡大していた。しかし、松陰が心から建設を望んでいたのは、尊王攘夷の精神にたち、それを実現するための学校であったのであろう。小伝馬町の牢獄で死を覚悟した一〇月二〇日に、とくに信頼をよせていた門下生の入江杉蔵にあてられた永訣書のなかで、門下生にその実現を託したのは、「尊攘堂」と「天朝の御学風を天下の人々に知らせ」るための「大学校」であった。「尊攘堂」というのは、記紀の神々や尊王攘夷に尽力した人物を顕彰しようとするものである。

しかし、早急な実現は困難であろうから、京都の学習院を利用するのも一方法であろうとあてていた。そこはほんらい公家の学校であるが、学習院の講釈には希望すれば武士をはじめ、農民でも町人でも聴講できるので都合がよい。⁽⁶⁾「尊皇攘夷の四字を眼目」としながらも、ひろい分野から優れた人物を集め、あるいは各地の優れた人物の見解を求める。そして、そのなかに「史局」を設けて、『六国史』以下の歴史を編纂する。そこには、「尊攘堂」も設ける。

この「天朝の御学風を天下の人々に知らせ」るための「大学校」を設立してほしいとの希望は、門下生にあてた遺書『留魂録』にも、おなじ獄につながれていた水戸の尊攘派の郷土・堀江克之助にあてた書簡にもしたためられていた。ここでも、京都の学習院のほかに、大阪の懷徳堂を利用するのも考えてよいとあてている。漢学を教えた懷徳堂も庶民の学べた半官半民の学校である。

松陰は「学問」と「學術」のための二種類の学校を構想していた。「学問」という点では尊王攘夷の思想教育が、「學術」という点では尊王攘夷のための西洋の軍事技術が重視されていた。水戸学と佐久間象山、両者の見解を継承したのだが、最後の時をむかえても、その早い実現を願っていたのは、尊王攘夷の思想教育のための学校であった。

3 自己確認の旅と読書

水戸の会沢正志斎から学んだ水戸学、江戸の佐久間象山から学んだ洋学。松陰にとっては、それらは対立するものではなかった。水戸学でも洋学でも「実学」という性格が強調されていたからである。

洋学についていえば、それを奨励した八代將軍の徳川吉宗以来、関心は医学そして殖産興業と富国強兵のための洋学にあった。松陰も洋学を自然の説明原理である科学としてではなく、技術の観点から評価していたのは明らかである。期待されていたのは「役に立つ」洋学だったのである。

水戸学も朱子学を基礎としながら、学問・事業一致がモットー、理や気、太極や陰陽や五行といった理論を詮索するのは二義的なことであり、尊王攘夷論による幕藩体制の強化を学の第一の目標としていた。大切なのは経世済民、そのための教育でなければならない。教育と政治は不可分、弘道館の教師も藩政に従事するのが原則、会沢も藩政にも積極的にかかわっていた。このような意味で、水戸学は「実学」、思想を現実化しようとする運動であった。いうまでもなく、松陰もこの意味での「実学」を最後まで志向した。

攘夷のための西洋の技術。「実学」をめざす水戸学はその点にかんするかぎり洋学と対立することはない。それは水戸藩尊攘派の共通の確信であった。攘夷を主張する徳川斉昭は、キリスト教を警戒しながらも、西洋の技術による大砲の製造に精をだす。弘道館でも限定された学生向けではあったが、洋学の講義がおこなわれるようになっていた。⁽⁷⁾

佐久間象山になると洋学にたいする警戒心はない。洋学の理は朱子学の説く理と同質のものであり、洋学を学ぶのは夷狄に屈することではなく、聖賢の道を全うすることであった。⁽⁸⁾『省儉録』では、洋学のなかでも技術の基礎には詳証術(数

学)があつたとして、「詳証術は、万学の基本也。泰西、此の術を發明し、兵略亦大いに進む。匄然^{けいぜん}、往時とは別なり」と説くことで、「西洋の芸術(技術)」の優位性を主張していたのである。⁹⁾この理解のもとに、前述のように、象山は朱子学の倫理と洋学の実利を併せて学ぶことの必要性を強調していた。松陰もそれを支持する。のちに、『講孟余話』公孫丑上第二章の「上欄」に、「漢学・蘭学各々日の半^{なかば}を以て修学すべき」という象山の教えを今でも思い出すとの朱書を残している。こうして、東北旅行と江戸遊学で松陰の思想は形成されていった。「周遊の益」である。しかし、松陰の全人生から考えてみれば、東北旅行と江戸遊学は萩の少年時代から松陰の心に刻まれていたものをたしかめる自己確認の旅であつた。

父の杉百合之助から四書・五經のきびしい素読の教育をうけた松陰は、五、六歳のころには『論語』や『孟子』を暗唱できた。そして、五歳で藩校・明倫館の兵学師範であつた叔父の吉田大助の養子となり、翌年六歳のときには、大助が亡くなつたため兵学師範の家督をついでからは、近くに住んでいた兵学者であつた叔父の玉木文之進が松陰の教師役を担当、兵学そして朱子学を仕込まれた。親族一同が松陰に大きな期待をよせていたのである。

きびしさを別にすれば、兵学師範として当然に課される修業であつた。しかし、松陰のまわりには他所とはちがつた教育環境があつた。外様の長州藩には毛利氏は朝臣大江氏の末裔であるという誇りと徳川家への恨みから(関ヶ原の戦いで西軍の大將となつた毛利氏は、中国地方一〇カ国、一二〇万石から、長門・周防の二カ国、三七万石の大名に格下げされた)、強い尊王の精神が底流していたのであつて、父の百合之助も「恭しくは、大日本は神の国なり」にはじまる『神国由来』(京都賀茂神社の神官玉田永教の著)を愛読していたように皇室を篤く敬慕する人間であつた。皇室敬慕の感情が松陰の周囲には存在していたのであり、松陰もその感化をうけた。

攘夷の思想についてもそうである。この時代長州藩でも日本に來航する船に無関心ではいられなくなつていた。兵学者の松陰にはもちろんである。幼くして兵学師範となつた松陰には玉木文之進のほか、吉田大助の門人が松陰の後見人となつ

ていたが、一五、六歳ころ、そのひとりで、明倫館の師範であつた山田宇右衛門からは列強のアジア侵略についての話を聞き、松陰じしんも国防について研究をした旨を回顧している（『講孟余話』尽心下第三章）。おなじころ、宇右衛門の勧めで、前藩主・毛利斉広の近侍であつた山田亦介から長沼流兵学を学びはじめたが、蘭学に詳しく、海防にもたずさわっていた亦介も、イギリスとフランスの手はインドから中国へと伸び、琉球も危なくなっているとの話をしてくれた。それにたいして、松陰は時宗や秀吉のようにはいかなくても、みずからも立ち上がらねばならない、とのべていた（『戊午幽室文稿』「含意齋山田先生に与ふる書」）。列強の侵略を憂い、それとどう戦うかについて、少年の松陰も思い巡らしていたのである。

少年松陰の心の中には尊王の精神も攘夷の精神も存在していた。松陰が下田から江戸に送られる途中で詠んだ歌の「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」と『留魂録』の冒頭にのせた「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」に見られる「大和魂」を借りれば、「大和魂」の精神の種子をたくましく育ててくれたのが旅であり、遊学であつた。九州の旅では、平戸の佐内のもとで会沢の『新論』に出会い、長崎では西洋の現実に接することができた。最初の「周遊の益」である。それを、さらに確認・発展させたのが、江戸の遊学であり、東北の旅行であつた。

4 「華」の地・萩——教育の原点としての孔子

「大学校」や「兵学校」の設立を提言していた松陰がみずからの手でつくりあげたのが私塾・松下村塾であつた。私塾一般がそうであつたように、外部から財政的な援助がなければ、とくに干渉もない。「大学校」や「兵学校」からはほど遠い、体制とは無縁のごく小さな学校である。そこで、松陰は家族や門下生の協力のもとに、教育の理想を実現させようとして全力をつくしていた。

松下村塾が存続したのは、松陰が杉家の敷地内の小屋を修理、それを塾舎として開始した一八五七（安政四）年十一月から、松陰が野山獄に再収監される一八五八年一月までのわずか一年あまり、その間に教えをうけた塾生の数はおよそ九〇名である。が、松陰は幽閉の身ながら親族や杉家で近在の子供たち相手の指導をしていたし、その前には、野山獄中の学習会に力を注いだ一年強の期間があった。

松下村塾では学年、時間割、試験といった規則的なものはなにもなかった。自由に来て自由に帰る。師の松陰が塾生を相手に自由に意見を交換をする。使われた教材は塾生によってさまざま、経書や兵学書をはじめ、史書、水戸学や陽明学関係の書物など、松陰の読んだ書物のなかからテキストが選ばれていた。身分の制限はまったくなく、ただ、場所柄から武士が大半、多くは藩校の明倫館に通えない下層武士の子弟であった。組織化された教育がなされていた緒方洪庵の適塾や広瀬淡窓の咸宜園と比較すれば古いタイプの塾といえる。

ここで私たちが興味をよせられるのは、松陰は教育をどのように考えていたかということである。

一八五六（安政三）年九月、杉家で近在の若者に個人指導をしていた松陰は、親族の久保五郎左衛門が主宰していた「松下村塾」のために『松下村塾記』を書いていたが、それがそのまま松陰の松下村塾の教育理念であったといつてよい（塾舎を建てたとき松陰はこの名を譲りうけた）。そこで、松陰は、「華夷の弁」を明らかにして、奇傑の人物は、この「夷」の地である萩の村塾から輩出されるはずであるとの期待と自信をのべ、そこでの教育の目的について、「学は人たる所以を学ぶなり」とし、「入りては則ち孝悌、出でて則ち忠信ならしめ」（『丙辰幽室文稿』）んことを期すると書いていた。基本は儒教的な意味での人間教育である。

この『松下村塾記』の一節は、会沢の『下学邇言』に師の藤田幽谷の教育理念として記されていた「人に教ふるに成人の道を以てし、道德を論ずれば、則ち忠孝に本づく」を念頭において書かれたと考えられる。¹⁰⁰ 久保清太郎への手紙（安政三

年七月ころ）によれば、松陰は『松下村塾記』を書く二カ月前に、『下学邇言』を借用、それを写し取っている。この幽谷のことは、一〇歳のときから幽谷のもとで学び、その学統をつぎながら、みずからも弘道館と塾の教育に心血をそそいだ会沢の教育理念でもあったのはいうまでもない。水戸の会沢からうけた影響はこのようなところにもあらわれていた。

ここでの「人」と「成人」は孔子のことばでは「君子」、「仁」の徳を身につけた人間のことである。だから、幽谷は教育の目的を、「君子」たることであっても「儒者」になることではない、とものべていた。細かな字句の穿鑿に没頭し、学問・事業の一致をおろそかにする「儒者」にはなつてはいけないというのである^四。

松陰も細かな字句の穿鑿にふけるような勉学を戒めた。『講孟余話』でも、「好んで瑣事末節」（告子下第四十六章）を論ずる学者をきびしく非難、「凡そ空理を遊び実事を忽せにするは学者の通病なり」（離婁下第二十六章）とのべる。だから、著名な学者の集まる江戸で、松陰の琴線に触れたのは象山だけだった。松下村塾の教育でもそれを実践する。塾生のひとりであった渡辺蕎蔵にも志の大切さを語ったうえで、「学者になつてはいかぬ、人は実行が第一である」（『関係雑纂』「渡辺蕎蔵談話第一」と論じていたという。

学問をとおしてだれもが君子になれる。孔子はそう考えて行動した現実的な理想主義者であった。松陰も野山獄の中で俳句や漢詩の会をひらき、『論語』や『孟子』の講義をはじめていたのである（『孟子』のほうは途中から輪講にかわる）。『孟子』の講義は杉家幽閑の時にも継続され、その内容は『講孟余話』としてまとめられたのだが、その開巻の部分でも、学問をする意味を、「俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る、復た人界に接し天日を拝するの望みあることなし、講学^{せつがく}切劇^{せつげき}して成就する所ありと雖も何の効かあらん云々。是れ所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず」（梁惠王上首章）とのべていた。孔子の「仁」のかわりに孟子は「仁義」をつかう。獄中にいるものが学問をしたとしても、なんの益になるのかというものもいるが、それは仁義の考えでない。つづけて、人と生まれて人の道を知らないのは恥かしいことで、

その気持ちがあるなら、どんな状況におかれていても書を読み、人の道を学ばねばならない、とのべて、『論語』の「朝に道を聞きて、夕に死すとも可なり」（里仁篇）を引く。

そうであるから、松陰は入塾を希望するものはだれでも断らなかつた。身分はもとより、基礎学力も問わない。松陰が入塾者に求めたのは学ぶ「志」であつた。渡辺蕎蔵も「始めて先生に見え、教えを乞ふものに対しては、必ず先ず何の為に学問するか問はる」（前出「渡辺蕎蔵談話第一」と証言している。なんのための学か、そこが明確にされていなければならぬ。叔父の玉木文之進の子である毅甫が元服のときに贈った「士規七則」でも「志を立てて以て万事の源と為す」（『野山獄文稿』）と記していた。『論語』の「吾十有五にして学に志す」（為政）の「志学」もそのような読み方をせねばならないであろう。それなのに、「志」を誤った学者のなんと多いことか、いま引用した『講孟余話』の文章のあとには、当今の学者を批判して、「嗚呼、世に読書人多くして真の学者なきものは、学の初め、其の志已に誤ればなり」とのべていた。

もちろん、読書を否定するのではない。松陰は人一倍の読書家だつた。孔子が、「黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず」（『論語』述而篇）というように、人を教える者は日々そのための学習につとめねばならない。肝に銘ずべきは、『論語』の「三省」（学而篇）のひとつ、「習わざるを伝へしか」。自分のものとなりきっていないものを、安易に受け売りしてはならない。松陰も『講孟余話』で「記聞の学を以て師となるに足らず」（離婁上第二三章）とのべていた。もの知りだけでは師となる資格がないが、読書家でなくては教師の資格がない。

松陰がめざした教育は「実学」、松下村塾の松陰は個々の塾生に与えたテキストを素材に、尊王攘夷の観点から現代日本の政治状況を語り、それにたいして正しい行動ができるような塾生の育成につとめていた。言葉よりも実行、『講孟余話』離婁上第二三章では、孔子の「君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す」（『論語』里仁篇）をあげている。

教育についても会沢正志斎や佐久間象山から強い影響を受けた松陰ではあつたが、じつは、彼らとの交わりによって、

萩の幼年時代に父から学んだ『論語』の教えを確認し、それを実践していたのだ。教育者・松陰の原点は武士の教養である儒教教育にあった。『講孟余話』でもいう、「聖学は学の善なる者なり。人の性を以て聖の学を学ぶは、此の上もなきことにて善の善と云ふべし」（告子上第十九章）。「聖学」とは儒教のこと。じつに多くの学に親しんだ松陰であったが、結局、この世に生をうけて最初にさづけられた儒教が最善の学であるとの確信に達していた。

旅に生きた松陰も、最後には松陰が生まれ育てられた萩にもどった。事實は、戻らざるをえなかったのだが、それを恨まない。それどころか、『松下村塾記』の「華夷の弁」では、どんな田舎でも自分の生まれた土地に劣等感を抱く必要はなく、そこで学問に励むならば、そこが「華」となるのだ、と萩の若者をはげます。そして、萩の地で子供時代に心に深く刻まれた儒教の精神をもって、萩の若者を育てようとした。

5 討幕へ——孟子の至誠に生き、そして死す

松陰が儒教の経書のなかでもっとも重視していたのは『孟子』であった。野山獄で同囚を誘ってはじめられた『孟子』の講義は、杉家での幽閉の身となつてからも家族を相手につづけられた。講義とはいっても、講義録の『講孟余話』が伝えてくれるように、松陰の講義は単なる『孟子』の注釈でない。『孟子』をもとにして、日本の歴史の事例も引き合いにだしながら、国家の形態や外交のありかた、学問や教育の問題など日本が当面している諸問題にたいする自己の考えを披瀝しようとする。同時に、『孟子』によつて自己の考えと行動を再検証しようとする。

たとえば松陰の信奉していた攘夷論については、孟子の性善説から説明できるといふ。「今如何なる田夫野老と雖ども、夷狄の軽侮を見て憤懣切齒せざるはなし。是れ性善なり」（『講孟余話』告子上第三章）である。どんな人間でも善性があるかぎ

り、外国がわが国を侮るのをみて、憤りを感じないものはいない。井戸に落ちようとしている幼子に抱く惻隱の情と同じである。

『孟子』を重視したが、無条件に追従するのではない。独自の解釈もする。尊王論については、『孟子』に松陰独自の「同」と「独」の原理を適用、道は「同」、つまり普遍的なものであるが、「国体」は「独」、つまり特殊的なものであってよいとして、「道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。君臣父子夫婦長幼朋友、五者天下の同なり。皇朝君臣の義万国に卓越する如きは、一国の独なり」(『講孟余話』尽心下第三十六章)とのべていた。水戸学から学んだ尊王攘夷論も『孟子』によって再解釈される。それによって、さらに強靱な思想となる。

こうして、孟子の性善説は松陰の思想と行動の原理となった。教育の可能性も性善説に立脚するのはいうまでもない。それが政治にむけられたとき、「至誠」となり、みずからの政治的行動は『孟子』の「至誠にして動かざる者未だこれあらざなり」(離婁上第二章)のもとに進められた。聾啞の僧・默霖との議論で、默霖が尊王攘夷の立場から討幕論を唱えるのに対して、松陰は諫正論で対抗した。誠意を尽くして藩主を諫め、藩主をとおして將軍を諫めべきだと主張する。

それでも、松陰の心にも変化がおきていた。一八五八(安政五)年六月一九日に幕府が勅許のないまま、屈辱的な不平等条約、日米修好通商条約を締結したのを知った松陰は、藩政府に「大義を議す」を提出、そのなかで幕府をきびしく糾弾する。「これ征夷の罪にして、天地も容れず、神人皆憤る。これ大義に準じて、討滅誅戮して、然る後可なり、少しも宥すべからず」(『戊午幽室文稿』)。これは征夷大將軍たるものの罪であって、天地も容れることができず、神も人もみな憤っている。とすれば、大義にもとづいて征夷大將軍を討ち滅ぼしてもよい。義に悖るものは討つてよいのだ。

ここに儒教のもつもうひとつの側面がみとめられる。儒教は君臣関係を基本とする幕藩体制を維持するイデオロギーとして機能する、支配の哲学であった。しかし、儒教は君臣関係を仁や義といった原理的ものから根拠づけるのであって、

だから、君が仁や義を失ったならば、その地位を奪われる。支配の哲学は革命の哲学として機能するのだ。仁や義をばげしく求めれば求めるほど、革命への意志もそれだけはげしくなる。まさに、松陰がそうであった。

このことについて孟子は『孟子』梁惠王下第八章ではこう考える。殷の湯王が夏の桀王を、周の武王が殷の紂王を放伐したが、そのとき桀王も紂王も仁義をそこった一介の匹夫にすぎなかった。湯王と武王は一介の匹夫を討ただけなのだから、忠義に反することではない。しかし、松陰は尊王論者、ここでも「同」と「独」の論理を適用、中国では革命によつて天子が変わるが、日本では「上天朝より下列藩に至る迄、千万世世襲して絶えざること中々漢土などの比すべきに非ず」（『講孟余話』孟子序説）なのである。天皇にはあてはまらない。

問題は討幕の可否である。征夷大將軍について、その地位にふさわしい者だけがその地位にあることができるのであつて、足利氏のように職をまつとうできなくなれば、ただちに廃されてよいと考える。天皇の命令が出されるかぎりではあるが。

天皇の命令はない。それでも、松陰は、『論語』の「義を見て為さざるは、勇無きなり」（為政篇）に生きる。やがて、松陰はそれまでの天皇と幕府にたいする認識を超えてゆく。一八五八（安政五）年一月、水戸の尊攘派による井伊直弼の暗殺計画に呼応して、反幕分子の弾圧の先頭にたつ老中の間部詮勝の暗殺をよびかけた。義を失つた奸臣たちは誅殺されねばならない。それは実行されなかったが、松陰は野山獄に再収監され、松下村塾の教育からも離れねばならなかった。

翌年の二月九日ごろに野山獄のなかから門下生の左保八十郎にあてた手紙では「真忠孝の志あらば一度は亡命して草莽崛起を謀らなければ行け申さず候」と書き送っていた。「草莽」とは在野の人間のこと、『孟子』万章下第七章にも見える。君臣関係にたつ既存の体制の枠組みをこえたところから、動かねばならないと考えはじめていたのである。政治は武士の独占ではない。野山獄から多くの門下生に崛起をよびかけ、野村和作と入江杉蔵には「天下を跋涉して百姓一揆にても起

こりたる所へ付け込み奇策あるべきか」(三月二六、二七日)と、百姓一揆の力を借りるのもひとつの方法であるかもしれない、とまで語っていた。人間の平等観はここにも貫かれる。君臣関係に立脚する松陰の至誠は現実的な君臣関係を超えてゆく。さらには、その線を超えて、野村和作には「草莽崛起、豈に他人の力を仮らんや。恐れながら、天朝も幕府・吾が藩も入らぬ。只だ六尺の微軀が入用」(四月ころ)ともいう。たしかに、松陰の心情を考慮すれば、藤田省三もいうように、「現世性を投げ棄てて、殆ど宗教的なまでに超越化しようとしている」とみることができる⁽¹²⁾。死を超えて生きる、それは門下生に遺した『留魂録』の心につながる。が、松陰の至誠が天朝・幕府・藩を超えて、ひとりの人間としての至誠、民衆ともにある至誠にゆきついたとも見ることができよう。

政治の主体は民衆、それは性善説の孟子の政治観でもあった。『孟子』には「天は民心を以て心とし、民の視聴を以て、視聴とする」(万章上第五、六章)とあり、『講孟余話』でもこの言葉をとりあげていた。天が地上を支配するというのが中国の伝統思想であるが、その天の意志は民衆に意志によつて代表される。孟子には民主的な革命の思想があった。

松陰は、至誠を言葉ではなく行動でしめそうとする。陽明学的である。たしかに、松陰は王陽明の『伝習録』、李卓吾の『焚書』、大塩平八郎の『洗心洞箚記』など陽明学関係の書物をよく読んでいた。だが、それによつて、行動の大切さを学んだというよりも、松陰の信念を確認したとみるべきであろう。それについて、松陰も「但し其の学の真、往々にして吾が真と会ふのみ」(『己未文稿』「子遠に語ぐ」)とのべている。松陰はずっと「義を見て為さざるは、勇無きなり」の精神に生きていたのだ。

しかしながら、安政の大獄のなか、松陰の行動は幕府に眼をつけられる。すでに野山の獄舎に収監されていた松陰は、その年の五月一八日に、江戸の評定所に召喚された。囚人用の唐丸籠で運ばれる最後の旅であった。

それでも、松陰は最後まで人間の善性を信ずる。至誠が幕府をさえ動かせると考えていた。江戸送りとなるとき、門下

生に「至誠にして動かざる者未だこれあらざなり。吾れ学問すること二十年、齡もまた而立（三〇歳）なり。然れどもいまだ此一語を解すること能はず。今茲に関左（関東）の行、願はくば身を以て之を験さん。乃ち死生の大事の若きは姑くこれを置く。己未五月 二十一回猛士」という書を贈っている。二十一回猛士は松陰の別号。私にしても至誠を真に理解しているというわけではないが、心から話せば幕府の役人たちにも分かつてもらえるにちがいない。それができれば、死んでも本望だ。

この江戸送りについて記した『東行前日記』にも、「孟子云はく、『至誠にして動かざる者未だこれあらざなり』と。其れ是れのみ。諸友、其れ之れを記せよ。其の他千万の言語は、八十一鱗に至ると雖も、苟も一睛を点ずるに非ずんば、遂に是れ真に非ざるなり」としたためる。至誠、これこそ画龍点睛のことば。二度と萩の土は踏めないかもしれない、しかし、至誠をもって当たるならば、私の行動も理解されるにちがいない。

だが、江戸の評定所での吟味においては、松陰の至誠は通じなかった。井伊直弼の最終的な断は死罪。松陰はそれをみずからの誠意の足りなさのためと考える。死を覚悟した一〇月二〇日、江戸の獄の松陰は父と叔父と兄あてに「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、非常の変に立至り申し候」とはじまる書簡を送っている。ふだんの学業が浅く、至誠が天地に通じなかったからだ、と自責の言葉を遺しているのである。

それでも、松陰はなお教育者でありつづけた。処刑の二日前に門下生に遺した『留魂録』では、「若し同志の士其の微哀を憐み継紹の人あらば、乃ち後来の種子未だ絶えず、自ら禾稼（穀物）の有年に恥ぢざるなり。同志其れ是れを考思せよ」と記す。同志たちが私の志をついでくれるならば、それは蒔かれた種が年々稔っていくと変わりが無いだろう。どうか、このことをよく考えてくれ。

松陰は至誠のために命を落としたといえるかもしれない。しかし、その至誠が門下生たちを動かしたのだ。門下生たち

は草莽の革命軍を結成、長州藩の対幕府戦争をリードする。そして、ついに徳川幕府を倒す。松陰の死を賭した教育と至誠の行動が時代を変えたのだ。

6 むすび

松陰の思想の基層には幼年時代から馴染み、松陰の血肉となっていた儒教の精神、それに尊王攘夷の心が根づいていた。塾生たちを学に喚起させ、社会の変革に立ち上がらせた松陰の教育の原動力もそこから生まれた。松陰のことばを借りるならばそれを「大和魂」とよべよう。そうよんだとき、私は、古在由重が『和魂論ノート』で松陰の「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」の歌をとりあげ、「ややもすれば『洋才』にくらべて『前近代的』な遺物とみられがちな『和魂』の実体のなかに、『反封建的』な核がひそんでいる事実を指摘しなければならなかった」とのべていたのを私は想い起す。¹³⁾松陰にとって「大和魂」は変革の原理として働いたのである。

それは「大和魂」が幕藩体制否定の契機を内包する尊王論と不可分であったからでもあるが、私には、加えて、松陰の受けた教育と松陰の授けた教育を考えると、その根底で、儒教の果たした役割を見落とせなかった。

儒教というのは体制維持の思想、君臣関係を中心とする儒教の名分論は幕藩体制を支える封建主義にふさわしいイデオロギーとみられていた。支配者の哲学であった。だから、武士であれば、『論語』『孟子』を暗唱できるようにならねばならない。儒教は、その体制の支配者である武士の教養とされてきた。ところが、儒教がその根源から学ばれたとき、それは社会を変革する思想にも転ずる。君子の道を学ぶ教育が徹底したとき、権力を根底から批判できる塾生を生み出したのである。正義の革命は肯定される。それは実行された。

そういつたものを生きた思想というのだろう。生きた思想のみが社会に働きかける力を有する。松陰も強調していたように、古典の注釈に明け暮れる幾万の朱子学者がいても、それは時代を動かせない。借り物では、それががどんなに高邁な思想であつても無力である。世の「学者」たちの思想には、社会的な存在意義はない。

しかし、現代の私たちは松陰からなにが学べるのか。

討幕の闘いに生き残った松陰の門下生たちによつてつくりあげられた明治政府は総力をあげて東京大学・帝国大学を設立した。目的は新国家の建設とその維持のための技術者と官僚の養成。のちの諸大学もそれを範とする。ヨーロッパの文明と技術の導入の場となつたという点で、明治政府は松陰の学校構想を実現したといえなくもない。

その一方で、松陰は「忠君愛国」の理想の教育者として動員された。修身の教科書にとりあげられ、松陰を顕彰するおびただしい本が出版される。明治の生んだ大学と「忠君愛国」の教育、それを両輪として、近代日本は動き出した。それは松陰が望んでいた教育とはちがう。人間の完成は脇におかれ、松陰が排した「学者」の養成が目標となつたのである。中国の学がヨーロッパの学に代わつたにすぎない。

それにたいする反省がなかつたわけではない。高等学校（旧制）に教養教育を導入することで、大学に進学するものに、大学にはない人間教育をほどこそうとしていたのである。しかし、若者のどれだけが高等学校に入れたのか。このエリート教育というのは松陰の教育理念とは逆のものだ。

人間の完成が教育の全面にあらわれたのは、敗戦後、「忠君愛国」の教育の反省にたつて制定された「教育基本法」においてであつた。ここでは、人間の完成が教育の目標として「人格の完成」が据えられた。大学ではそれを担うのが教養教育であつたのだが、「教育基本法」や教養教育の意義がどれだけ理解され、その現実化にどれだけの努力がなされてきたか。戦後の教育の歴史をトータルとしてみれば、人格と切り離された知識と技術の教育が支配、この経済至上主義の社会を推

進する役をになってきたのではないか。

それにもかかわらず、私たちはなお人間性の回復とそのための社会の改革の可能性を教育に託さねばならない。そうであるならば、「忠君愛国」の教育者としての松陰が葬られたのは当然であったとしても、人間の完成めざした教育者・松陰の思想と生き方は簡単に棄てられるべきでなかった。今日でもなお、松陰を学ぶべき意義はけっして小さくない。

注

吉田松陰の著作、日記、書簡などの引用は『吉田松陰全集（普及版）』（岩波書店、一九三九—四〇年）によった。松陰の伝記的な事項については、高橋文博『吉田松陰』（清水書院、一九九八年）などを参照した。『論語』『孟子』にかんしては、『新釈漢文大系・論語』（吉田賢抗、明治書院、一九六〇年）、『新釈漢文大系・孟子』（内野熊一郎、明治書院、一九六二年）を利用した。

- (1) 野口武彦『江戸の歴史家・歴史という名の毒』筑摩書房、一九七九年、二七六ページ。
- (2) 一八四四（弘化元）年、藩政改革の行き過ぎを咎められて斉昭が失脚したのにもない、東湖らとともに会沢も蟄居を命ぜられたが、松陰が訪ねたところは蟄居も解かれて南街塾の教育に力を注いでいた。一八五五（安政二）年一月には、明倫館で松陰の門下生であった赤川淡水が入塾した。野山獄に収監されてまもない松陰は赤川に「赤川淡水の常陸に遊学を送るの序」（『野山獄文稿』）を贈呈している。この年、会沢は弘道館教授頭取に復帰した。
- (3) 『吉田松陰全集・別巻』大和書房、一九七二年、六四ページ。水戸城大手門の向かい、三の丸に建てられた弘道館は永井宅や会沢宅から近い距離にあった。松陰たちは、校舎のなかには入らなくても、その近くをなんども通ったであろう。
- (4) 『日本の思想20・幕末思想集』筑摩書房、一九六九年、一五一ページ。

- (5) 同書、一六三ページ。
- (6) 一八四七（弘化四年）、京都御所建春門外に開設された。漢学・国学兼学の学校であったが、一八七〇（明治三）年に廃止。一八六二、三年ごろには尊攘派の支配下にあった。高杉晋作も一八六二年に「学習院一件御用掛」として公武の周旋事務を命ぜられた。
- (7) 鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館、一九八七年、一九六ページ以下。『新論』で攘夷論を展開していた会沢もなくなる一年前の一八六二（文久二）年には『時務策』を書いて開国論を唱えるようになる。
- (8) 源了圓『徳川合理思想の系譜』中央公論社、一九七二年、三二七ページ以下。
- (9) 前掲、『日本の思想20・幕末思想集』一五七ページ。
- (10) 『水戸学大系・第二巻・会沢正志斎集』水戸学大系刊行会、一九四一年、三二四ページ。
- (11) 鈴木暎一、前掲書、四六〇ページ。
- (12) 藤田省三『精神史的考察』平凡社、一九八二年、九九ページ。
- (13) 古在由重『和魂論ノート』岩波書店、一九八四年、九三ページ。

付記

仲間うちではドサマワリとよんでいた旅のグループがあった。哲学者の古在由重先生を座長に、年二回、先生の奥様と先生の古い友人から先生の主宰する読書会に参加していた若いメンバーまで、二〇名ほどの老若男女が二泊三日で名所旧跡に出かけてゆく。幹事役は青木書店の編集長だった江口十四一さん、私も座員のひとりだった。

昼の観光は早めにすませ、宿での時事放談に花が咲く。それが終わるとプロ野球談義、古在先生は広島ファンだった。夕食から酒の会へ、煙草だけで酒を嗜なかった先生だが、ひねりのきいた冗談をとばす。適当な相手がみつかりと碁をはじめ。打つ手は辛い。もうひとつ、先

生の好んだのは科学談義、学生時代に物理を専攻したということで、相手は私となる。実数と整数のどちらが先なのか、黒いと暗いの違いは、といった質問に答えねばならない。はたして、どこまでうまく答えられたか。

一九八五年の一二月に訪れたのは伊豆の下田、もちろん吉田松陰が話題となった。あるいは、松陰にゆかりの地を探索したくて下田が選ばれたのかもしれない。宿では以前に古在先生が松陰を詠んだ戯歌の話もでた。松陰がペリーの艦隊に近づくために漕いだ小舟の櫓をむすぶのにつかったフンドシにちなんだものだったが、残念ながら歌を正確には想い出せない。

その後先生の『和魂論ノート』で松陰の「大和魂」のことを読む。科学史を学び、教えるようになっていた私は、洋学者・佐久間象山の弟子としての松陰について多少の知識をもっていたが、松陰の劇的な人生について考えさせられたのはこのときであった。

しかし、松陰の全集を手に入れ、日記や書簡まで読んでみようとしたのは数年前のことである。そのひとつ『東北遊日記』のなかで、松陰が水戸での逗留の後で松岡の手綱（水戸藩内であるが家老であった中山家の半独立の領地で、松岡城があった。一八六八年一月に松岡藩として正式に独立。現高萩市）に宿泊したときの記事（嘉永四年二月二一、二二日）に目が止まった。手綱では阿久津彦五郎を訪ねて検地などについて話し合い、翌日には、同宅で、地理学者・長久保赤水の『龍子山記』を閲覧したあと、彦五郎の案内で赤水の墓を詣で、その日の宿となる磯原（現北茨城市）の野口源七の家にむかったというものである（野口家は東湖と親交があった）。ついで、松陰が江戸の友人・斎藤新太郎あての手紙で、彦五郎のことを、「全くは雅ならずと雖も亦全くは俗ならず、且つ交遊を喜ぶの意あり」と評していたことも知った。

もしかしたら手綱の阿久津とは、私の祖母が少女時代に養女として育てられた阿久津家ではないのか。当主の阿久津信道さんに電話で尋ねたところ、そのとおり、信道さんの曾祖父にあたる彦五郎は璞斎ともよばれていた槍術家で、藩校・就将館の師範だったという。祖母が私の実家に嫁いできたあと、かわって祖母の妹が養女となり、その子が信道さんである。どこか松陰の伝える彦五郎に似たところがありそうな、元編集者（秋田書店編集局長）である。

そんなことで、小さかったころ私は、祖母に手を引かれ手綱の阿久津家に連れてゆかれた。祖母からは、彦五郎のことについてはなにも聞

かされていないが、彦五郎の子で、祖母にとっては養父であった阿久津督は、片腕の村長だったとの話は記憶に残っている。新政府に出仕、警視庁の巡査になったが、泥棒と刀を交え、そのとき腕を切り落とされたのだという。

二〇年ほど前、私は三〇数年ぶりに阿久津家を訪ねる機会があった。二万五千石という小さな城下町であるが、市街化をのがれたために江戸時代の雰囲気がただよう手綱の町に、阿久津家の長屋門が幕末とほとんど変わらない姿で残されていた（そのとき、おなじような長屋門の屋敷である隣の松村家の家の入り口に立てられていた教育委員会の案内板を見て、そこが東京大学の植物学教授となった松村任三の生家であるのをはじめて知った。就将館で学んだあと一八七〇年に藩の貢進生として大学南校に入学している。ついにながら、松陰が宿をとった磯原の野口家からは詩人の野口雨情がでる）。

その阿久津家に、松陰が足を運んでいたのである。私には松陰がさらに身近な存在となった。萩を訪ね、東京や水戸での足跡を追いながら、松陰という人間の生き方を以前にもまして深く考えてみるようにもなっていた。講義でもとりあげた。

もちろん、松陰とのつきあいが今日までつづいているのは、そのような縁だけからではない。日本の教育の危機をどうみるのか、わけても、あの戦争を反省して生まれた人間教育としての教養教育がこうも貧困化の道をたどっているのはなぜなのか。大学に身をおく私には、なお教育の意味をその根底から問いつづけねばならないと考えているからである。